

10. 灌水、施肥、土づくり

(1) 灌水

① 発芽期のかん水

- ・開花、結実、幼果肥大のエネルギー源は、貯蔵栄養と土壤水分が必要です。
 - ・成葉のない春先は、細根のそばに水が十分ないと吸わないので、十分なかん水を行います。
 - ・春先に干ばつになると、良い花が咲かず結実が悪くなり、その後の新梢の伸びや玉肥大も劣ります。
- また、ホウ素欠乏が発生し、発芽が遅れ、葉が細長くなり、小さく、葉脈間にクロロシスが発生します。花が開花せず落蕾するか、開花しても結実しません。
- ・3月に干天が30日程度続いたら、15mm程度のかん水を実施します。
 - ・4月に干天が15日程度続いたら、30mm程度のかん水を実施します。

② 収穫前のかん水

- ・収穫7日前まではかん水を行い、玉を肥大させます。
 - ・原則、収穫7日過ぎは、糖度低下を防ぐため、かん水を行いません。
- ただし、乾燥し過ぎている場合は、収穫間際でも、軽い散水を行いましょう。

① 収穫後のかん水

収穫が終了した品種に実施します。降雨が無ければ、礼肥を施用しても効果ができません。10～15日、しっかりとした、降雨が無ければ、10a当り20mm程度のかん水を行いましょう。

(2) 施肥 施肥基準を記載

① もも・ネクタリンの施肥基準

10a当たりの目標収量 白鳳 3,200kg 白桃 3,500kg

② 土壌PH 5.5～6.0

施肥時期	肥料名	施肥量	肥料要素成分量 (kg)			
			窒素	リン酸	加里	苦土
9月中旬	有機専科	2袋	2.4	0.8		
10月下旬 ～ 11月中旬	グリーン長野 果樹専用有機 入り72	4袋	6.4	1.6	0.8	1.2
	果樹の力	2袋				13.6
合計			8.8	2.4	0.8	14.8

③ 強樹勢樹対策資材の施用について

- ・強樹勢樹対策に、下記資材を施用します。

施用時期 3月上旬

施用資材・量 スミクリン10a当り2袋

※土壌診断により、リン酸過剰園は、施用を控えます。

④ 弱樹勢樹対策について

時期 5月中頃まで。ただし、収穫の早い品種ほど早めに施用します。
※これ以降、6月初旬頃～中下旬頃までは硬核期に入ります。
極端な施用は核割れや生理落果を助長しています。

施用資材 追肥肥料の場合、有機専科10a当り1袋又はノルチッソ10a当り半袋。樹が傷んでいる場合は、土壌からの養分吸収が悪いため、葉面散布で対応します。

⑤ 弱樹勢樹対策について

施用時期 10月下旬～11月中旬

※12月以降の施用は、生理落果・核割れ・徒長・遅伸びにつながります。

施用資材及び施用量

- ・グリーン長野果樹専用有機入り72⇒10a当り4袋
- ・果樹の力 ⇒10a当り2袋

留意事項

- ・徒長枝の多い若木や樹勢の強い樹は、グリーン長野果樹専用を減らすか施用はしない。また、落葉が長引き一斉でない樹も施用量を減らします。
- ・施肥後は、5から6cmの深さで中耕します。
- ・草生栽培園は中耕しなくても孔隙があり、肥効が高く出ます。
- ・堆肥等を使用する場合は、窒素分量を計算し、グリーン長野果樹専用の施用量を減らします。
- ・マンガン欠乏(トラ葉)の発生園では、基肥に硫酸マンガン10a当り10kgを施用します。元水田では発生が多い傾向があります。
- ・ホウ素欠乏園では、硼砂を1樹当り200g施用します。

(3) 土づくり

深耕について(物理的性質の改善)

排水の悪い園では、有効土層を深め、土壌の通気性や透水性を良くして、根の活動を活発にすることが重要です。若木で伸びの悪い樹や、元水田等は実施しましょう。

時期 落葉期から年内に実施します。できれば11月中に実施したいです。

※遅れると細根の発生が少なくなり、春先の干ばつの害を受けやすくなります。

対策

条溝法

- ・若木や排水不良園に適しています。

- ・深さ40～50cm・幅30～40cmの溝を樹間に掘ります。
- ・1年目縦・2年目横と場所を変えて繰り返します。
- ・根の広がりに対して直角の方向に処理をします。その際は根の先端をわずかに断根する程度とし、断根が20%を越えると生育障害の原因となります。

タコツボ法

- ・深さ40～50cmの穴を掘ります。
- ・樹幹から2m程度の場所に、10a当り4～8カ所の穴を掘る方法です。
- ・毎年掘る穴の場所を移動させます。断根が少なく成園向きです。
- ・ただし、排水不良園では掘った所に水が溜まりやすいので、排水対策も併せて行いましょう。
- ・深耕後は、有機物等の土作り肥料を投入して下層まで改良しましょう。
- ・サブソイラーやバックホーを利用します。
- ・1度に行うと断根により樹勢低下となるため、5～6年かけて樹幹周辺を一巡できるよう計画的に行います。

(4) 土壌pH（酸度）の調整について（化学的性質の改善）

作物が適正に生育し、養分が吸収できるようになるには、作物毎に適正な「pH」範囲があります。

近年の土壌診断の結果は、適正範囲外が目立っております。特に、適正範囲より中性に傾いている状態のものが多く肥料分の吸収や根の張りが悪くなります。

ももは、比較的酸性土壌を好むため、中性に近づいている場合は「ガッテンペーハー」を10a当たり5袋を基肥に合わせて施用します。

(2022年6月改訂版)